

29【街の散策からの気づき発見】

初夏の古隅田川と梅若伝説を散策

会員 K.T.

古隅田川の大落古利根川合流点から川沿いに古隅田川の川に沿って自転車で散策している。初夏の木々は若葉から緑を濃くしてきた。川にカモがいた。餌の小魚をさがしているのだろう。現在の古隅田川は、さいたま市岩槻区南平野地区を管理起点として、岩槻区と春日部市の境界を流れ途中で、旧古隅田川・上豊川・上院落等の支流と合わせて大落古利根川の右岸に合流する流路延長4.8kmの川である。古隅田川は住宅や工業団地の中を流れ、周辺的生活用水等が流れ込むため、濁っていて、綺麗な川とはいえない。

かつて、武蔵国安達郡と下総国葛飾郡の国境を分けていた大河とは、想像もできない小さな河川になっている。

ほどなく古隅田川緑道に着いた。川沿いの道は切れ、田圃道を超え、満蔵寺に着く、今日は、ここの梅若塚を見に来た。

梅若塚は墨田区の木母寺(もくぼじ・隅田区堤通2丁目)の方が良く知られている。同じ、武蔵国であったことによるのだろうか、春日部市と墨田区は、同じような伝説が残されている。

能の大家世阿弥の子、観世元雅は、この梅若丸の伝説を基に謡曲「隅田川」の作品を創作した。元雅は世阿弥の後継者として期待されていたが、30代半ばで夭折している。

「能 隅田川」のあらすじを国立能楽堂のホームページから咀嚼して、引用する。

「春の夕暮れ時、武蔵国隅田川の渡し船で最終の舟を出そうとしていると旅人が現れ、女物狂がやってくると告げる。女は都北白河に住んでいたが、我が子が入買いにさらわれたために心が狂乱し、子を探しにはるばるこの地まで来た。船頭は、狂女に、舟に乗りたければ面白く狂って見せろ、と言う。

女は『伊勢物語』九段の「都鳥」の古歌を引き、自分と在原業平とを巧みに引き比べて、皆を感じさせ、舟に乗り込むことができた。船頭は川を渡しながら一年前の今日、三月十五日に対岸下総の川岸で亡くなった子供、梅若丸の話を物語り、皆も一周忌の供養に加わってくれと頼んだ。舟が対岸につき、皆下船しても、女は降りようとせず泣いている。船頭が訳を尋ねると、先ほどの話の子は、我が子だという。

船頭は女に同情し、手助けをして梅若丸の塚に案内し、大念仏と一緒に弔うよう勧める。夜の大念仏で、女が母として、鉦鼓を鳴らし、念仏を唱え弔っていると、塚の中から梅若丸の亡霊が現われる。抱きしめようと近寄ると、幻は腕をすりぬけ、母の悲しみは一層増していく、やがて東の空が白み始め、夜明けと共に亡霊の姿も消え、女は、ただ草ぼうぼうの塚の前で泣くばかりである。」という能の演目である。能の作品なので、梅若塚伝承の説明看板とは多少違うも、一人寂しく死んだ子と、捜し歩いた母の一念、その悲しみは、十二分に汲み取れる。元雅が長命であれば、どのような新しい能の世界を創作したのであろうか、と思う。

余談ながら、観阿弥(1333 頃～1384)、その子世阿弥(1363 頃～1443)、その子元雅(1394 頃～1432)の親子三代が生きた時代は、鎌倉幕府が滅び、南北朝時代(1336～1392)の動乱を経て、室町幕府(1338～1573)が三代将軍足利義満(1358～1408)の代で最盛期を迎え、約240年続く室町幕府の体制が固まっていく時代になる。観阿弥は伝統芸能の大和猿楽に曲舞の音曲を取り入れ、能の原形を作った。世阿弥は、これを更に工夫し、能の美意識となる「幽玄」(深遠で奥深い、優美で趣のあるさま)の世界を完成させた。元雅は能に悲哀や運命の世界を取り入れ、能に新たな世界を創作した。梅若塚の史実は定かではないが、川で亡くなった子供を悲しむ親の話は、川の傍で暮らす流域の集落には、実話として起きていたであろう、と思う。

